



第7回 伝説の 編集人

駐車場で産声をあげた 144万部の週刊誌

文 森 功

text by Isao Mori

「齋藤十一は週刊新潮で文学をや
りたかったんだ」

出版界初の試みとなった週刊誌
の創刊について、新潮社の編集幹
部たちに聞くと、そうとらえる向
きが多い。それはある意味正しい。
しかし、だからといって週刊新潮
は、従来の文芸誌の延長ではない。

週刊新潮がスタートした一九五
六年に発表された政府の経済白書
には、「もはや戦後ではない」と
いう鳩山一郎政権時、後藤譽之助
の「脱戦後宣言」が踊った。その
言葉どおり、日本が飛躍的に豊か
になり、社会の関心事も変化して
いく。この年の十一月に開かれた
メルボルン五輪は、日本選手のメ
ダルラッシュに国中が沸いた。水
泳の二百メートル平泳ぎの古川
勝、レスリングではフェザー級フ
リー部門の笹原正三、ウエルト
級の池田三男、体操・鉄棒の小野
喬が表彰式で金メダルを胸に下げ

て君が代を歌い、日の丸を仰いだ。
日本が敗戦国のイメージを払しょ
くし、国際的に認められた年だと
いえる。また、日本の登山隊がヒ
マラヤ山脈のマナスルへ初登頂
し、エチオピア皇帝が初めて日本
を訪れ、戦後初の国家元首の訪日
となった。芋を食べて飢えをしの
いでいた国民のなかから、パン食
の洋風な生活を楽しむ世代まであ
らわれた。

出版界も盛況だった。前出の政
府の経済白書の前年にあたる五
五年七月号の文藝春秋「文藝界」に、
石原慎太郎の『太陽の季節』が掲
載される。石原は文藝界新人賞を
とり、その翌五六年一月に芥川賞
に輝いて太陽族という流行語まで
生んだ。週刊新潮に参加し、読売
新聞社会部の遊軍記者だった村尾
清一は、ブームになったこの小説
にもかかわりがある。

「日本が国際的に認められる時代

葉を足した。

の一週間後に新聞の文芸欄にベタ
記事が載るくらい小さな位置づ
けでした。で、『新人賞なんだか
ら、誰かの真似するのは当たり前
だよ』とつけ打加えておきました」
そう言いながら、村尾は石原の
芥川賞の受賞を破格の扱いで記事
にする。芥川賞受賞作となったこ
の小説について、時代の変化の象
徴ととらえていた。

「『もはや戦後ではない』という
経済白書とヨットで遊ぶ写真を組
み合わせ、社会面に大きく掲載し
たんです。ある意味、これがブ
ームの火付け役となり、石原慎太郎
や映画デビューした弟の裕次郎が
脚光を浴びていったのかもしれま
せんね」

と村尾。読売の記事が芥川賞の
権威を高めたといえるかもしれな
い。太陽の季節はこの年の三月に
文藝春秋ではなく、新潮社から単
行本として出版される。

「齋藤さんは時代をとらえる独特
の感覚をお持ちなのだと思います
た。それを実践したのが週刊新潮
だった」

村尾が齋藤の話に戻し、こう言

「齋藤さんや野平に言われて僕は
新潮社と仕事を始めるわけです
が、週刊新潮が創刊した頃は、驚
きましたね。呼ばれて行ってみる
と、駐車場のような広場に編集部
員が集まっている。ライトバンの
ようなワゴン車を五、六台並べ、
そこで取材の打ち合わせをしてい
るじゃないですか。なんとも頼り
ないな、と感じました。編集部が
手狭で急ごしらえだったので、広
場を使っていたのかもしれないま
せ」

週刊新潮は向かいの駐車場広場で
創刊の第一声をあげた。初代編集
長の佐藤亮一は六四年四月に野平
健一が編集長に就任するまで、お
よそ八年のあいだ、編集人の肩書
を残してきたが、齋藤が編集を統
括してきたのは繰り返すまでもな
い。

亮一の編集時代を含め齋藤の率
いた週刊新潮は、飛躍的に部数
を伸ばしていった。創刊翌年の
一九五七年には、早くも年間の
平均発行部数が七十万を突破し、
翌々年の五八年には八十万部に達

した。それまでの週刊誌の発行部
数は、五四年に週刊朝日が記録し
た百万部が最高だったが、週刊新
潮の発刊した五六年にはすでに
六十万部に落ち込んでいた。かた
や週刊新潮は創刊三年目の五九年
にして、発行部数を九十万部台に
乗せ、百万部という週刊朝日の記
録を追い抜くのも時間の問題だと
いわれた。

それどころか週刊新潮の快進撃
はとどまるところを知らない。創
刊から六年足らずの六二年一月七
日号が実に百四十四万部に到達す
る。創刊号の三倍を優に超える伸
びだ。

それを見た週刊誌の各編集長た
ちは、齋藤十一の編集スタイルを
まねるようになるが、発行部数は
なかなか追いつかず週刊新潮は業
界のトップを走り続けた。週刊新
潮がなぜそこまで売れたのか。そ
の理由については、さまざまに語
り継がれてきた。

(敬称略 つづく)

Profile

福岡県生まれ。新聞社、出版社勤務を経て2003年よりフリーラン
スのノンフィクション作家に転身。08年、09年2年連続「編集者
が選ぶ雑誌ジャーナリズム賞作品賞」、2018年『悪だくみ』（文藝
春秋）が「大宅壮一ノンフィクション賞」受賞。『許永中』『同和と銀行』
（講談+α文庫）など著書多数、最新刊は『ならずもの』（講談社）

